

難民キャンプという場

カクマ・キャンプ調査報告

栗本英世

はじめに——難民への関心

近年、「難民」に対する関心が世界的に高まっている。世界各地における武力紛争と内戦の結果、大量の難民が発生している。国連、国際社会、受け入れ諸国は、早急な対応を迫られている。また、悲惨な難民の姿は、マスメディアで報道されるとともに、インターネット上を飛びかい、私たちにはすっかりお馴染みのものになっている。

学問の分野では、つよい実学的色彩を帯びた「難民研究」というジャンルが成立している^{†1}。それは、紛争研究、開発援助研究、精神医学、国際法などの複合領域である。

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の公式ホームページに掲載されている最新の統計(2002年初頭の暫定的統計)によれば、UNHCRの「援助対象者」は1978万人に達する。その約2割、417万

人がアフリカに存在する。2744万人に達した1995年以降は減少傾向にあるが、依然として大量の人口が国連の庇護下にある。

2002年初頭の段階でのUNHCRの援助対象者には、国際法上で規定された狭義の難民(1205万人)のほかに、難民の地位を申請中の「庇護申請者」(94万人)、母国に帰ったばかりの元難民である「帰還民」(46万人)、国内難民である「国内避難民」(505万人)、「帰還した国内避難民」(24万人)などが含まれる。

援助対象者全員を「広義の難民」と考えることができるが、それでも、世界の難民全体を含むのではない。まず、UNHCRではなく、UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の保護下にある374万人(2000年)のパレスチナ難民は、この数字から除外されている。また、自国で難民化した人びとである国内避難民の総数は、2000万人から2500万人と推定されているが、そのうちUNHCRの援助対象になっているのは、わずか505万にすぎない。UNHCRの援助・保護を受けない大量の国内避難民は、自国政府や武装組織による迫害を受ける危険もたかく、狭義の難民よりも不安定な存在である。

^{†1} オックスフォード大学難民研究プログラム(Refugee Studies Programme)、および同プログラム(研究所)が刊行する雑誌『難民研究』(Journal of Refugee Studies, 1988年発刊)は、難民研究推進の中心的役割を果たしてきた。

さて、難民に関する国連、NGOの膨大な量の報告書、マスメディアによる繰り返しの報道にもかかわらず、「難民として生きるとはいかなることか」について、私たちの理解はきわめて限られている。私が、2000年からケニアのカクマ難民キャンプで調査を開始したのは^{†2}、こうした理解のギャップを埋めたいと考えたからである。

もうひとつの理由は、1978年から86年にかけて南部スーダンでパリ（Pari）という民族集団の調査をしていたときに付き合っていた人びとの多数が、内戦のために難民化していることである。カクマにはパリ人もいと聞いていた。カクマ訪問は、86年以降中断したままのパリに関する調査を再開することでもあった。

過去20年にわたるスーダンやエチオピアでの調査の過程で、私はたくさんの難民や元難民と出会ってきた。しかし、難民を主要なテーマとして難民キャンプで生活するのは、今回がはじめての経験であった。

1 人類学的フィールドワークの場としての難民キャンプ

カクマは、ケニアの北西部、リフトヴァレー州トゥルカナ県に位置する。年間降雨量200ミリメートル程度の乾燥した半砂漠地帯に位置する。現在ここには、8万人以上の難民が暮している。

^{†2} 1999年度サントリー文化財団研究助成「スーダン難民における生活世界の再構築」（研究代表者：栗本英世）、2000年度文部科学省科学研究費補助金「東アフリカにおけるグローバル化過程と国民形成に関する地域民族誌的研究」（研究代表者：松園万亀雄東京都立大学教授）、2001年度以降は文部科学省科学研究費補助金「基盤研究B(1)」 「難民をめぐる社会・政治的諸力の相互作用——アフリカ北東部・大湖地方における強制移住、国家、国際機関、NGO」（研究代表者：栗本英世）。

1992年までは、ちいさな町と地元の牧畜民トゥルカナの集落だけが存在した場所に突如出現した、きわめて人工的な空間である。食料の自給活動がほぼ不可能な自然条件下で、難民たちは配給食料に依存して生活している。

カクマの難民の約4分の3は南部スーダン難民が占めており、そのうちパリ人は約800名である。私はカクマで、パリの旧友たちと再会することになった。正確に言えば、私が出会ったのは15年にわたる内戦を生き残った人たちと、内戦のなかで亡くなった旧友たちの遺族たちである。

カクマでの調査は、パリ人に関する民族誌的な調査の延長という側面がある。しかし、「村」ではなく「難民キャンプ」という、まったくあたらしいセッティングにおける調査である。

1970年代末から80年代半ばにかけてのパリ人は、人類学における古典的な「部族社会」のイメージにぴったり適合するような共同体を構成していた。すくなくとも、当時の私にはそう感じられた。パリ人の全体が、リプル（Lipul）の丘という、サバンナ平原の独立丘の周囲に営まれた6集落に居住しており、丘に登れば全集落を見渡すことができた。他民族集団との境界はきわめて明確であり、「伝統的」な首長制度と年齢組織、およびクラン組織というポイントを押さえれば、社会を記述・分析できるように思われた（栗本 [1996a] 参照）。

現在では、人類学におけるこうした「部族社会」のイメージ——明確な境界をもち、ある有機的な全体を構成する——は、きびしい批判にさらされている。そうした現在の視点から振り返っても、またパリ人は19世紀半ば以降、「国家」を含む外部の政治勢力と深い関係をもってきたことを認識したうえでも、パリという民族集団は、リプルの丘を中心にして凝集性の高い社会を構成していたという認識は、基本的には誤っていなかったと思え

る。

パリ社会に関するこうしたイメージを抱いたままで、1988年からエチオピア西部のガンベラ地方でアニューワ (Anywaa, Anuak) 人の調査をはじめたとき、私はある「とまどい」を感じた (栗本 [1996b : 159-167] 参照)。パリ語とアニューワ語は、方言レベル程度のちがいがいしかない、きわめて近縁の言語であり、両者は共通の出自を認識しているにもかかわらず、アニューワ人の社会はパリとは対照的に、きわめて凝集性の低いものを感じられたからである。そもそも、「アニューワ社会」という包括的な実体が存在するのかどうか、そのこと自体が疑問だった。

しかし、カクマ・キャンプに比べれば、ガンベラ地方あるいはアニューワ人のほうが、はるかに「全体」を見わたすことが容易であった。

設立当初のカクマ・キャンプは、ふたつの川にはさまれた細長い地域に立地していた。川はキャンプの端で合流する。現在はこのキャンプは「カクマ1 (ワン)」と呼ばれ、難民の増加に伴って、カクマ2とカクマ3が形成されている。それでも、キャンプの地理的境界は明確であり、すくなくとも公式には、つまりUNHCRの立場からすると、だれが居住者・援助対象者なのかははっきりしている。それにもかかわらず、私はなぜ難民キャンプは混沌としており、理解が容易ではないと感じたのか。

その原因はいくつかある。第一に、カクマ・キャンプの住民は、高度に多国籍、多民族、多言語、多文化、多宗教の構成をもっていることがある。やや古いが、2000年9月の統計によれば、合計6万6400人の難民の出身国別内訳は、スーダン5万1953名、ソマリア1万1501名、エチオピア1995名、ウガンダ331名、コンゴ民主共和国203名、ルワンダ177名、ブルンディ107名、エリトリア27名、無

国籍108名であり、8カ国からの難民から構成されている。また、スーダン難民だけでも数十の民族集団の出身者から構成されており、全体ではいくつの民族集団が存在するのか見当がつかない。

第二に人口移動率が高いことがある。仮に、今年と去年の難民総数がおなじだとしても、出入りがあるため中身は入れ替わっている。例えば、2001年には毎月1000名の新難民が流入していた。ケニアの他の難民キャンプから移送されてくる者もいる。また、ソマリアなどの母国へ帰還する難民もあり、さらに先進国への再定住のため旅立つ難民もいる。また、国境を接する南部スーダンの東エクアトリア地方とのあいだでは、UNHCRの管轄外の自由な往来もある。言い換えれば、難民キャンプは、住民にとってあくまで「仮住まい」にすぎない。数年以上の長期にわたって暮している難民でも、いつかはここを出て行く。カクマを終の棲家と考えている人はいないだろう。

第三に、難民キャンプという、さまざまな権力が作用する場の問題がある。たとえば、かつてのパリ人の場合なら、南部地方の自治政府とその背後にあるスーダン政府、1991年までのアニューワ人の場合なら、エチオピアの社会主義政権が、外部の権力との関係を考察するさいの最重要の軸であった。カクマ・キャンプでは、複数の軸を考察する必要がある。まず、キャンプの運営と管理全体に責任を負うUNHCR、そのもとで実際のプロジェクトを遂行する多数のNGOがある。最大のNGOは、ルーテル派世界連盟 (LWF) で、食料・薪・石炭の配給、飲料水の供給、シェルター (住居) 建設資材の供給、道路建設・補修、教育プログラムの実施、コミュニティ・プログラムの実施などを担当している。多数のNGOは、UNHCRのもとで活動しているとはいっても、かならずしも一体であるわけではなく、齟齬が生じる場合もある。

また、ケニア国内に存在するカクマ・キャンプは、当然のことながらケニア政府の管轄下にある。行政の責任は、カクマの行政官（ディストリクト・オフィサー）、治安の責任は、キャンプのはずれに駐在する警官隊が担っている。

さらに、難民たちが母国から持ち込んだ、政府・反政府の、および民族集団間の政治的関係も考慮に入れる必要がある。以上のように、キャンプという場では、複数の政治的諸力が並行して作用しており、相互の関係は錯綜している。

第四に、カクマ・キャンプの都市性がある。カクマを中心とする半径200キロメートルほどの広大な地域——ウガンダ北東部、スーダン南東部とエチオピア西南部を含む——のなかで、カクマ難民キャンプはもっとも高度な都市的機能を備えた集落なのである。ここには、さまざまな公的施設がある。教育面では幼稚園、小学校（生徒2万人）、中学校、高校のほかに、職業訓練校と通信制大学がある。医療と社会サービスの面では、病院、診療所、図書館、多目的コミュニティセンター、若者資源センター、多目的女性センター、スポーツ施設などがある。

さらに、難民自身が建設した施設として、図書館、教会とモスクなどのほかに、多数の商業施設がある。キャンプには、雑貨店、肉屋、八百屋、製粉所、飲食店、バー、衛星TV・ビデオシアター、美容院などが密集して立ち並ぶ広大な一画がある。商人のほとんどはソマリア人とエチオピア人で、海外からの送金の受け取り業務や国際電話のサービスまで営まれている。商業活動の活発さは、私たちの「難民キャンプ」に関する常識的なイメージをくつがえすものである。

こうしたきわめて動態的なキャンプでは、難民自身、国連やNGOの職員、ケニア政府の役人と警官のだれをとっても、「全体」を把握している人

はいないだろう。

2 難民キャンプという場の特殊性と普遍性

私のカクマにおけるこれまでの滞在期間は、合計5週間ほどにすぎない。限られた時間のほとんどは、パリたちとの付き合いに費やしてきた。彼／彼女らの難民としての経験については、なにがしかの理解は得られた。しかし、パリ人以外の難民については理解からはほど遠く、キャンプの組織的な運営のシステムについても知識は限られている。

おそらく、丸一年をキャンプで暮したとしても、理解は依然として部分的なものにすぎないのではと思える。

人類学の古典的フィールドワークは、「物知り」と言われるインフォーマントは「全体」を知っており、複数の「物知り」から得た情報をつなぎ合わせることによって、人類学者は対象社会の全体像に迫ることが可能だという前提に立っていた。カクマではこうした前提は通用しない。

人類学者のジェイムズ・ファーガソンは、経済不況下のザンビアのコッパーベルトの都市で、鉱山労働者を対象としたフィールドワークに従事した。彼は、その過程で、「他者」と生活を共にすることを通じて、徐々に彼らの社会的世界を理解するようになるという前提が崩壊するのを感じさせられた。「原住民」だけでなく、人類学者も周囲でなにが起きているのかよくわからない状況に置かれ、疎外され、目にするもののおおくと断絶していると感じた。そして、人類学者は、民族誌的に知られた場所について権威主義的に語る資格がないという感覚にとらわれたという（Ferguson [1999: 19-20]）。彼の実験的な民族誌『モダニティへの期待』は、まさにこの状況と認識を出発点

としている。

難民と鉱山労働者というちがいはあるが、私はファーガソンに共感する。考えてみれば、カクマで私が感じたことは、都市や移民を対象にフィールドワークをおこなってきた者にとっては、至極当たり前のことなのだろう。その意味で、難民キャンプは特殊な空間であるにしても、普遍的な特性を有しているといえる。

今後の調査でカクマ・キャンプという場について、そこで生きる難民たちについて、どこまで理解が深まるか、はなはだ心もとないが、この試みは現代アフリカの社会的空間に関する人類学的フィールドワークの試金石であると考えている。そ

れは安易に「全体」を指定することなしに、「全体」に迫る手法を探る試みでもある。

[参考文献]

栗本英世[1999a] 『民族紛争を生きる人びと』(世界思想社).

——[1996b] 「招かれざる人類学者の絶望と希望——エチオピアにおけるアニューワ人の調査——」(須藤健一編『フィールドワークを歩く——文科系研究者の知識と経験——』嵯峨野書院).

Ferguson, James[1999] *Expectations of Modernity: Myths and Meanings of Urban Life on the Zambian Copperbelt*, Berkeley: University of California Press.

(くりもと・えいせい/大阪大学大学院人間科学研究科)